

シリーズ8

「流れ」でおさえよう！

今回は、中世の文化編です。人間関係を中心にまとめてあります。親子なのか、師匠・弟子関係なのか、そういう関係はないのかなどなど、きちんと理解し頭に入れておくと、思い出すときに引っ張り出しやすくなりますよ。

高校生にとって文化史はなかなか難しいようです。本物の作品を見るのが一番よいのですが（本物を見ると、その大きさに圧倒されたり、色彩にビックリさせられたり、逆に「えっ、こんなに小さいの」とガッカリさせられ、という感動が湧いてきますから）、時間的にも物理的にも難しいですね。ですから、可能な限り、図表で確認してくださいね。

なお、内容は山川出版社の『日本史B用語集』を参考にしています。

第6回 鎌倉文化・室町文化

<奈良仏師＝慶派>

康慶 → 運慶 → 湛慶
→ 康弁
→ 康勝

定朝の後、京都に院派・円派、奈良に慶派が起こります。慶派ら奈良（南都）仏師は興福寺を拠点とし、地元の南都復興に活躍しました。天平彫刻に学んだ写実性を深化させていき、新しく力強い作風を創っていきました。

康慶の子運慶は「興福寺無著・世親像」「東大寺南大門金剛力士像（阿形像）」を造ります。運慶の子には長男湛慶（「三十三間堂千手観音坐像」「東大寺南大門金剛力士像〈吽形像〉」）、第3子康弁（「興福寺天灯鬼・竜灯鬼像」）、第4子康勝（「六波羅蜜寺空也上人像」）がいます。ちなみに、快慶は康慶の子どもではなく、弟子ですね。代表作に「東大寺僧形八幡像」があります。

<鎌倉時代に宋から招いた禅僧と開山した寺院>

蘭溪道隆 (大覚禅師) → 無学祖元 (仏光国師)
1246年来日 1279年来日

鎌倉幕府は栄西の死後、南宋から多くの禅僧を招きます。なかでも、蘭溪道隆は京都泉涌寺や鎌倉寿福寺にいましたが、**第5代執権北条時頼**の帰依を受けて、1253年に**建長寺を開山**します。建長寺はのちに鎌倉五山の筆頭になります。

無学祖元は**第8代執権北条時宗**の招きで来日し、1282年に**円覚寺を開山**します。円覚寺はのちに鎌倉五山の第2位になりますね。

ところで、円覚寺といえば舍利殿ですよ。舍利殿の建築様式といえば、何でしたっけ？

そう、**禅宗様**でした。

<室町時代の水墨画の変遷>

黙庵 → 可翁 → 明兆 → 如拙 → 周文 → 雪舟
南北朝 南北朝 北山 北山 北山 東山

水墨画は墨の濃淡で自然や人物を象徴的に表現するものですね。水墨画の草創期、つまり**南北朝文化**においては、「布袋図」を描いた**黙庵**や「寒山図」を描いた**可翁**がいます。黙庵は最初的水墨画家で、元にわたり、そこで亡くなります。

北山文化においては、「瓢鮎図」を描いた**如拙**はおさえましょう。「瓢鮎図」といえば、瓢箪でなまずをおさえる禅の公案を題材とした絵でした。如拙の前に登場するのが、「五百羅漢図」などを描いた東福寺の画僧**明兆**です。また、如拙の後には「寒山拾得図」を描いた**周文**もいます。

そして、日本水墨画を大成するのが**東山文化**の**雪舟**ですね。彼は備中に生まれ、相国寺では周文について水墨画を修めます。そして、明を訪れ、帰国後、山口を拠点に西国をまわります。作品には「**秋冬山水図**」(秋・冬の2幅からなります)、「**四季山水図巻**」(なんと15m以上にも及ぶ長大な画面に、日本の四季を描いています)、「**天橋立図**」(雪舟晩年の作品で、下絵として描かれたようです)などがありますね。

さて、**如拙・周文・雪舟3人に共通する寺院は何でしょう？**

そう、**相国寺**ですね。同志社大学の北東に隣接してあります。

<連歌の変遷>

二条良基 → 飯尾宗祇 → 山崎宗鑑
南北朝 東山 東山

南北朝期の**二条良基**は北朝の摂政・関白・太政大臣を歴任しました。彼は1356年に成立した最初の連歌集である『**菟玖波集**』を撰し、連歌の規則書『**応安新式**』を制定（1372年）し、連歌の方式と地位を確立させました。『菟玖波集』が勅撰に準じられてからは、和歌と対等の地位を築くこととなります。なお、二条良基は北山文化で登場する世阿弥の「家庭教師」ともなった人物ですよ。

応仁の乱の頃に出た（飯尾）**宗祇**は**正風連歌**を確立し『**新撰菟玖波集**』を撰します。ほかにも、宗祇・肖柏・宗長の師弟3人で詠んだ連歌百句を載せた『水無瀬三吟百韻』があります。

これに対し、**山崎宗鑑**は、より自由な気風を持つ**俳諧連歌**を作りだし、『**犬筑波集**』を編集しました。連歌から江戸時代に登場する俳諧への橋渡し役となります。

さて、宗祇に関してなんですが、彼は「古今伝授」をある人物から受けました。それは誰からでしたか？

答えは、**東常縁**です。

<佗茶の変遷>

村田珠光 → 武野紹鷗 → 千利休（宗易）
東山 東山 桃山

8代将軍足利義政の時代、つまり東山文化の時代に**茶の湯の開祖**である**村田珠光**が登場します。彼は大徳寺の一休宗純に参禅して、禅の世界観を得て、茶室で心の静けさを求める佗茶を創出しました。

戦国時代には堺の代表的茶人である**武野紹鷗**が登場します。唐様趣味を和様に転化する工夫をし、二畳・三畳の小間の茶室や竹の茶入れ、茶杓などを創案して佗茶をさらに簡素化させていきました。

桃山時代には**千利休**が**佗茶を大成**させます。利休は堺の商家の出で、武野紹鷗に茶の湯を学び、信長・秀吉の寵愛を受けて草庵の茶を完成させます。ただし、大徳寺の山門の上に自分の木造を置いたなどの理由で秀吉の怒りを買って、自刃させられました。

ところで、**利休作の茶室、それもわずか二畳しかない京都大山崎にある茶室は何でしょうか？**

そうですね、国宝の**妙喜庵待庵**ですね。

<立花の変遷>

池坊専慶 → 池坊専応 → 池坊専好
東山 桃山 寛永

生花は座敷の床の間を飾る立花形式が定まり、床の間を飾る花そのものを鑑賞する形が作られていきました。立花の名手として京都六角堂にいた池坊専慶が知られ池坊華道の開祖となります。

16世紀の中頃には池坊専応が登場し、立花を造形芸術にまで高めていきました。

16世紀末から17世紀初めにかけて池坊専好が出て、立花の構成理論に儒教を導入し、立花を大成させます。